ヘーゲルのイエナ時代の住居について

松　村　健　吾

Über die Wohnungen der Hegels Jenaer Periode

Kengo Matsumura

イエナは古い建物がそのまま残る大学街で、建物の壁の至る所に Gedenktafel と呼ばれる記念板が貼ってある。我々がよく知っているゲーテやシラーやヘルダーリンやヘーゲルの名前も見える。ヘーゲルの記念板は現在は街の南側のレブダーグラーベンと呼ばれる通りに面した建物に張り付けられていて、「ここにヘーゲルが1801-1806年まで住んだ」とある。このような記念板がイエナの街中の家に貼られるようになったのは、1858年のことであり、イエナ大学創立300年の記念行事として行われ始めた。だがその時には記念すべき人々が暮らしていた時（1800年前後）からは既に50年以上も経過していたので、場所を特定するのはなかなか困難であった。その苦労はその時の責任者の報告からもしのばれる(1)。家賃の領収書等の正確な資料が全ての著名人に関して残されているわけではない。むしろ残されていない場合が大半である。だから当時の手紙とか、伝承に頼らざるを得ない。どうしても分からない場合には、希望者に自分の家に記念板を貼ってもらうこともあったという。そうした地道な探求が現在もなお続行されているのである(2)。記念板の掲示にも優に150年ほどの歴史があることになる。だからヘーゲルの記念板に限ってもそれなりの変遷があったとしても当然である。時と共に研究も進化し、変化する。だが現在の視点からして、今のヘーゲルの記念板の表示は十分には納得できない。「1806年までここに住んだ」と言うが、ヘーゲルはその後も1807年の3月まではイエナにいて、その後でバンベルクに移住している。この間は一体どこに住んでいたのであろうか。疑問が湧いてくる。ヘーゲルに関するいろいろな本

レブダーグラーベン11にあるヘーゲルの記念板

を調べてゆくと疑問は解消するどころか、かえって増大してくる。ある記録によればヘーゲルはクリプステイニッシェン・ガルテンに住んでいたとある。クリプステイニッシェン・ガルテンとこの記念板のある住所とはどう関係するのであろうか。

ヘーゲル研究の古典であるローゼンクランツの『ヘーゲル伝』（1844）もヘーゲルのイエナでの住居については何も語っていない。続くハイムの『ヘーゲルとその時代』（1857）も同様である。有名な哲学史家のクノー・フィシャーの『ヘーゲルの生涯、著作、学説』（1901）も、著者自身が15年以上もイエナ大学の教授をしていたにもかかわらず、ヘーゲルの住居に関しては何の記述もない。その後の研究者も同様である。ただハリスが『ヘーゲルの発展、夜の思想、イエナ1801-1806』（1983）でヘーゲルの最初の住居をクリプステイニッシェン・ガルテンだとしている。ただしそれがどこにあったかの記述はない。最新のものとしては、ピンカートの『ヘーゲル 伝記』（2000）とイェシュケの『ヘーゲル ハントブーフ 第二版』（2010）があるが、両者共にヘーゲルの住居はクリプステイニッシェン・ガルテンであり、シェリングと同居していたとある(3)。これらの不正確な記述についてはすぐ後で批判的に検討することにする。ともかく、ことヘーゲルのイエナでの住居に関してはヘーゲル研究の分野では研究と呼べるものは一切存在しないのであり、研究と呼べるものはイエナの地方史の研究者たちの研究のみである。その研究は既に述べたように優に150年の歴史を有しているのであるが、ヘーゲルの住居としてはUnterlauengasse15だけが知られていて、クリプステイニッシェン・ガルテンの名前は出てこない。私は2010年の春から一年間、イエナに滞在する機会を得て、この問題に興味を掻き立てられた。以下は私のささやかな研究報告である。

1. ヘーゲルの住居に関する手紙・資料

1800年の11月に久しぶりにシェリングに手紙を書いてイエナ行を打診したヘーゲルは、シェリングの返信（現存せず）を受け取って、1801年1月にイエナに到着した。泊まる家が必要である。探さなければならない。実際の探索はヘーゲルに任せて、我々は彼らの手紙の中にそれを探索することにしよう。ヘーゲル関係の手紙、その他でヘーゲルのイエナでの住所を知る手掛かりとなるものは、私の知る限りでは、①シェリングの1801年7月4日の手紙、②ヘーゲルの1801年10月の講義掲示、③ヘーゲルの1801年の12月30日の手紙、④シェリングの1802年5月24日の手紙、⑤ゲーテの1806年10月18日の手紙、そして参考資料として⑥エリーゼ・カンペの『グリースの生涯より』（1855年）だけである。他の手紙は住所については何の情報も与えてくれない。手紙には封筒がついていて、住所が必ず書かれていたはずであるが、手紙は残されていても封筒はなくなっているケースが多いのであろう。

先ずは①のシェリングの手紙を見てみよう。これが実は最大の難問である。この手紙はメーメルに宛てて書かれたものである。（なおこの手紙はヘーゲル研究では、G.ニコリンの『ヘーゲル 同時代資料』（1970）に収録されたのが最初である。）メーメル（1761-1840）はエアランゲン大学の哲

学教授で、1800年から「エアランゲン文芸新聞」を編集・発行していた。彼がシェリングに、1800年に出版されたブーターヴェクの著書の書評を頼んだのであるが、シェリングは自分では断り、代わりに「優れた徹底的な仕事の出来る」ヘーゲルを紹介した。その時、ヘーゲルの住所をKlipsteinischen Garten in Jenaとしている。この住所は現在のイエナにはなく、これがどこなのかは全く不明である。このような基本的な情報が解明されないままに放置されているところに、現在のヘーゲル研究の貧弱さが露呈している。とまれ、これがヘーゲルのイエナでの最初の住所と思われる。メーメルはおそらくこの住所でヘーゲルに手紙を書き（現存せず）、ヘーゲルはメーメルに8月26日に返信している（現存する）。この住所が有効であった何よりの証拠である。

②はヘーゲルがイエナ大学での最初の講義の時に黒板に貼り出した講義掲示に書かれたものであり、1801年10月には「アルテン・フェヒトボーデン」に転居していたことを示している。この講義掲示はビーダーマンが1981年にイエナ大学の資料の中から発見して、発表したものであるが[4]、無造作に掲載されただけであり、それはほとんど注目されなかった。その後、アカデミー版のヘーゲル全集の第五巻の編集者の解説の部分に掲載されている（GW.5,654）。見られるようにそれはイエナ大学でのヘーゲルの最初の講義に際しての、ヘーゲル自身の手になる紹介文である。何故に第五巻の本文中にそのまま採用・掲載されなかったのか不思議と言う他はない。ともかくヘーゲルはここで自分の住所を「アルテン・フェヒトボーデン」と明記している。

③はヘーゲルがフランクフルトの知人のフーフナゲルに宛てて書いたものであり、そこで自分は今シェリングと一緒に雑誌を発行しようとしているとして、そこにこう書いている。von Schelling (mit dem ich zusammen wohne--,und der sich Ihnen bestens empfehlen läßt) としている（B.I,65.）。カッコ内を訳せば、「僕はシェリングと一緒に住んでいます、彼はあなたにくれぐれもよろしくとのことです」となる。ではシェリングはどこに住んでいたのであろうか。シェリングの住所も確実には分からないが、現在の研究では[5] Johannisplatz 22だとされており、ここに記念板が貼ってある。記念板にはシェリングの名前の下に「1798/1803」とある。これはシェリングがイエナにいた期間であり、正確さに欠けている。同じ研究者によるとシェリングはここに1798-9年まで住み、その後1801-3年まではFürstengraben 16に住んだとされている[6]。これも極めて大雑把な研究であるが、この問題は後で考察することにする。

ヨハニスプラッツ22のシェリングの記念板

④もシェリングの手紙に書かれていることであるが、ヘーゲルの宛名の下に、Jena. auf dem alten

Fechtboden. と書いてある（B.I,67.）。この住所は次の⑤でのゲーテの手紙に書かれているヘーゲルの住所と完全に一致する（B.I,122.）。少なくとも1802年の5月から1806年の10月まで、ヘーゲルが「アルテン・フェヒトボーデン」に住んでいたことは確実である。「フェヒトボーデン」とは「剣道場」というほどの意味であり、このあたりに昔フェンシングの道場があったのである。そこがその後、住居として利用されるようになったのである。だからその地名は、「昔の剣道場跡」というほどの地名であろう。

⑥については後で詳しく触れることにするが、グリースがヘーゲルの隣に住んでいたというものである。

以上が私が提供できるヘーゲルの住居に関する事実的な資料である。この資料だけではヘーゲルがイエナ時代にどこに住んでいたのかは明らかにならないので、以下では私の推理を加えながら出来るだけ事実を結び合わせていこう。最大の難関であるクリプステイニッシェン・ガルテンから見てゆくことにしよう。

2. Klippsteinischen Garten の春

1801年の1月にヘーゲルがイエナにやって来る。ヘーゲルの最初の住居についての正確な書類は何もないが、①のシェリングの手紙から推測して、ヘーゲルが最初に住んだのは、ハリスも推測するように、クリプステイニッシェン・ガルテンだと考えていいであろう。ただしハリスの言うようにそれが「1801年1月21日」であったというのは何を根拠としているのか全く不明である。ましてやその時「地平線には雲さえもほとんどなかった」というのはハリスの単なる戯れであろう。

ヘーゲルが最初からクリプステイニッシェン・ガルテンに住んだという傍証になるのが先に示した⑥で紹介したエリーゼ・カンペの『グリースの生涯より』である。グリースはタッソーの翻訳家として有名になった人物であるが、ハンブルクに生まれて、学生時代にイエナにやって来た。イエナ地方史研究者によると1795-99年、イエナのLöbdergasse 12に住んでいたという。ここは南門の出口のすぐそばである。しかしグリースは実際にはその後もイエナにしばしば滞在して暮らしているが、その頃の彼の住所は不明である。しかし有力な情報がある。エリーゼ・カンペの『グリースの生涯より』である。Elise Campe（1786-1873）はグリースと同じくハンブルクの生まれであり、書籍商と結婚し、その関係でイエナのフロムマンのもとを訪問した時、グリースと出会い、その後も二人は故郷ハンブルクで親交を深めた。エリーゼはグリースの死後その伝記を書いた。そこにはこう書いてある。

「1801年の初め頃、グリースはタッソーの翻訳に打ち込むために、街の近くのGartenwohnungに引っ越した。そこでグリースの仲間に新たな人物が加わった。それはシェリングが彼に紹介したヘーゲルである。ヘーゲルはGartenwohnungでグリースの隣に住んでいた。」また少し後では、「グリースはバンベルクで以前の同居人のヘーゲルと再会した」とある(7)。

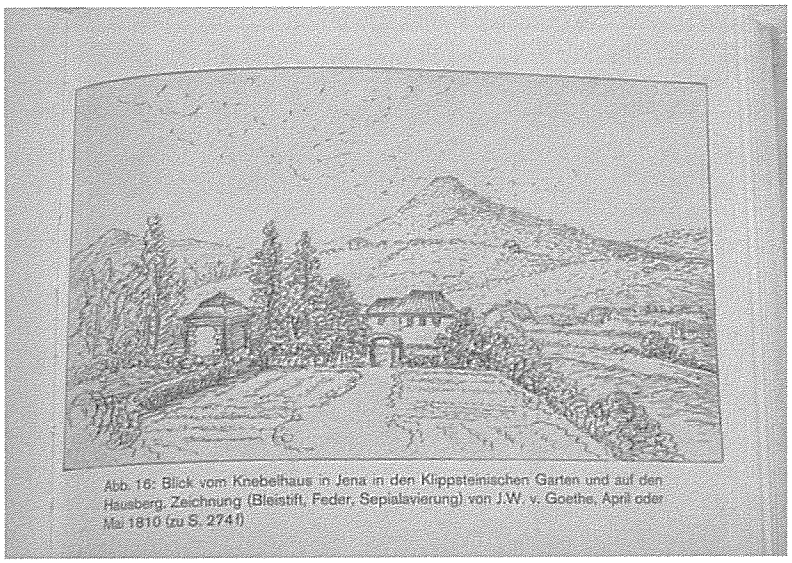
ここから1801年の初めの頃、二人が同じ家に同居していたことは確実である。また注目すべき

はGartenwohnungという言葉である。直訳すれば「庭付き住居」とでもなろうか、Gartenhausというのとほぼ同じであろう。(またシェリングが手紙で使用しているGartenlogisというのも同じであろう。下記の「5.イエナ時代のシェリングの住居」参照。)ヘーゲル研究者のニコリンはこのGartenwohnungを「クリプステイニッシェン・ガルテン」を指していると推測している[8]。おそら妥当な推理であろう。彼らは常時集まって、哲学や文学の話に花を咲かせていたことであろう。そして一二度はシラーも来て遊んだかもしれない。シラーは1799年の末に住みなれたイエナを去ってワイマールに転居したが、その後も何度かイエナに来ている。1801年の3月にもひと月ほどイエナの自宅のガルテンハウス(現存する)に滞在している。シラーは遠縁の親戚であるヘーゲルを以前から知っており、一時期家庭教師の職を紹介したくらいであるが、今後も折に触れてこの新進の哲学者をゲーテやフンボルトといった著名人に紹介、推薦するのである。ヘーゲルはこの春、クリプステイニッシェン・ガルテンでデビュー作『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』の執筆に精を出していたであろう。グリースもまたここで、タッソーの翻訳の仕上げに励んだのである。ちなみにグリースの翻訳したタッソーは、Torquato Tasso's Befreites Jerusalemという表題で、1800年から1803年にかけて四分冊で、イエナのフロムマン書店から出版されている。

3. Klippsteinischen Gartenはどこにあったのか?

ヘーゲルがイエナで最初に住んだと思われるクリプステイニッシェン・ガルテンの場所については、これまでのヘーゲル研究においては不明のままであった。そもそも一般のイエナの地方史研究ではヘーゲルは「アルテン・フェヒトボーデン」に住み続けていたと思われていたのであり、それはこの論文の最初で紹介した現在のヘーゲルの掲示板からも明白である。一部のヘーゲル研究者だけが、ヘーゲルはその前にクリプステイニッシェン・ガルテンに住んでいたことを知っていたが、それがどこであるかは誰も知らなかった。私はイエナに一年間滞在する機会を得たので、それを利用してクリプステイニッシェン・ガルテンの場所を解明しようと努力を重ねてきた。様々な迷路をたどり、空想に翻弄されながら、やっとその場所を突き止めることが出来たので、そうした途中経過は省略して、結論だけを記しておく。場所はイエナの南門の郊外のパラディースと呼ばれている野原の一角であり、現在の住居表示ではVolksbad 5となる。(この論文の文末に掲げた「参考資料1800年前後のイエナの街」を参照されたい。)そこは現在のフォルクスバットの裏の駐車場の辺りであるが、庭園は更に先の、現在のバスのバーンホーフの辺りにまで広がっていた。ここに1971年まで以前のクネーベルの家があったが、その年に取り壊されて現在に至っているという。そこがクリプステイニッシェン・ガルテンであった証拠はクネーベルの友人ゲーテの文章である。ゲーテは日記や手紙で何度か「クリプステイニッシェン・ガルテン」に言及しているが、その一つでこう言っている。

No.5. Aus Major v. Knebels Fenster hinab in den Klippsteinischen Garten, das Häuschen links Besitzung von Schnaubert. [9]



ゲーテが描いたクリプステイニッシェン・ガルテン

（画像は C.W.H.F.v.Lyncker Ich diente am Weimarer Hof. Jünger Lauchner.（Hrg）Böhlau Verlag. 1997. S.160. による。）

ここで「No.5.」とあるのは、ゲーテが 1810 年の 4 月から 8 月に、イエナとカールスバードで描いた 22 枚の絵につけた番号であり、No.5. はまさにそのイエナの「クネーベル少佐の家の窓からクリプステイニッシェン・ガルテン」を描いたものであり、「左の小屋はシュナウバーの所有」である、とある。その画像を取り込んでおこう。

クネーベルとこの家との関係については後で詳しく述べることにする。先ずはこの家の持ち主であるクリプステイン（Johann Dieterich Klippstein）についてみておこう(10)。以下は最近出版されたクリプステイン家の家系図調査の書物からの要点の引用である。（著者はクリプステイン家の末裔であり、ペーター・クリプステインである。なお Klipstein の表記では、p を重ねて、Klippstein とするのが一般的であるようである。）

「彼は 1743 年以来イエナ大学の庭師（ Kunst- und Lustgärtner）であり、1761 年に結婚して、二人の子供を設ける。二人目の子供は早くに亡くなった。長男 Johann Christian Gottlob はイエナ大学を卒業している。彼も植物学者であったらしいが、その後すぐにロシアのサント・ペテルスブルクに移り住んだ。その後の足取りは分からない。父親の方は当時の有名な植物学者である。リンネやハーラーと知り合いであった。」

更にこの著者ペーター・クリプステインは Koch の本から次のようなくだりを引用している。

「クリプステインの果樹園 Baumgarten がパラディースにあった。彼がどこに住んでいたのかは誰も知らないが、恐らくはボタニッシュ・ガルテンの庭師の家 Gärtnerhaus に住んでいたのであろう。1799 年には彼の所には、いつもロシアの外交官のアウグスト・コッツェブーが宿泊していた。」Koch, Geschichte d. Stadt Jena, Stuttgart 1966,S.205.

［ここでの著者のKochの発言の内、クリプステインの住所についての推察は明らかに間違いであるが、コッツェブーに関する記述は正しいようであり、コッツェブー自身がその年にクリプステイニッシェン・ガルテンで楽しい会合を開いたと言っている。コッツェブーはクリプステインの息子と同級生のようである。息子がロシアに行ったのもその関係かもしれない。］

「妻のMaria Christinaは1788年に亡くなった。彼は93歳で、1808年3月26日に亡くなった。」とあるが、となりのページS.137では1803年となっている。どちらが正しいのか不明であるが、おそらくは1803年が正しいと思われる。

このイエナ大学の庭師のクリプステインがいつガルテンハウスを手に入れて、部屋を賃貸に出すようになったのかの正確な日付は分からない。だが1790年代には賃貸に出されている。クネーベルの友人でイエナ大学医学部教授ローダーが1796年にクネーベルに宛てて書いた手紙の中に、自分たちは今クリプステイニッシェン・ガルテンに賃貸で住んでいる、とある。そしてクネーベルが遊びに来てくれる時には市内にある自分たちの家を自由に使ってくれとしている(11)。そうしてその後、1801年の初めにはここにヘーゲルが住み、またシェリングの友人であった文学者のグリースが住むことになったのである。ヘーゲルがどのようにしてこの家の情報を得たのかは不明であるが、おそらくはシェリングを介してであろう。そしてシェリングはおそらくはカロリーネから情報を得たのであろう。シュレーゲル兄弟に代表される初期のドイツロマン派はイエナ市内のロイトラガッセ5のデーダーラインの家に住んでいたが、A.W.シュレーゲルとカロリーネ夫妻は最初は郊外のこの辺りのガルテンハウスに住んでいた（このガルテンハウスがどこかは正確には分かっていない)。そうした経験がカロリーネからシェリングに伝えられたのであろう。またカロリーネは1801年4月にイエナに帰った時のために、シェリングと一緒に「パラディースのガルテンハウス」に住もうと試みたが（AA.III.316)、その計画は挫折したという。

4. ヘーゲルの転居

②の資料から明らかなように、ヘーゲルはこのクリプステイニッシェン・ガルテンに長くは住まず、私講師になって冬学期が始まる1801年10月には市内のアルテン・フェヒトボーデンに転居している。講義のことを考えれば市内に住んでいた方が便利である。④と⑤の資料を合わせて考えれば、ヘーゲルはここにそのままイエナ時代の最後まで住んだと考えられる。ただ気になるのは資料③での「シェリングと一緒に住んでいる」という発言であり、このヘーゲル自身の発言に誘導されて「ヘーゲルはシェリングと一緒にクリプステイニッシェン・ガルテンに住んでいた」という推測が現在のヘーゲル研究でなされることになる。先ずはヘーゲル自身が言っている「シェリングと一緒に住んでいる」という問題から見てゆこう。

1801年の後半からはシェリングとの共同編集の『哲学批評雑誌』の仕事が多忙を極める。この雑誌の計画が二人の間でいつごろ出来上がったのかは全く不明であるが、雑誌の「広告」は1801年12月26日の「エアランゲン文芸新聞」に初めて載った。1801年の当初のヘーゲルやシェリン

グの多忙さを考えると、この雑誌の準備は早くてもこの年の秋にしか始まらない。しかもこの雑誌は実質的にヘーゲルの雑誌であり、シェリングはこの当時にも他の雑誌も発行していたので、この雑誌にはあまり精力を割いてはいない。シェリングも超多忙な日々を送っていたが、無名のヘーゲルもそれに劣らぬ多忙の日々を送らざるを得なかったのである。後で示すように、シェリングはおそらくはこの年の4月にカロリーネがイエナに再びやって来たのをきっかけとしてFürstengraben 16に転居したのであろう。フュルステングラーベン16はヘーゲルの家からそれほど離れてはいないが、その雑誌を印刷しているフロムマンの家はそのすぐ隣のフュルステングラーベン18である（住居表示は道路を挟んで南側が奇数番号、北側が偶数番号になっている）。フロムマンは1798年にイエナに移ってきた書籍商であるが、最初は市内に住んでいたが、1801年から「郊外」のここに転居して出版業を手広く行うことになる。ゲーテの作品なども大半がフロムマンのところで印刷されて、チュービンゲンのコッタ書店から出版されたものである。ヘーゲルたちの『哲学批評雑誌』も全く同様である。ヘーゲルは雑誌編集のためにおのずと印刷所でもあるフロムマンの家に出向き、そのすぐ隣のシェリングの家にも入り浸っていた。それが1801年12月の手紙での「シェリングと一緒に住んでいる」ということなのであろう。ヘーゲルはそれ以前にイエナ大学での教授資格を得たのをきっかけに、1801年10月には「アルテン・フェヒトボーデン」に新しい住居を見つけて移っていった。この住居を2か月もたたないうちにヘーゲルが引っ越したとは考えられないので、正式の住居はこちらであろう。ちなみにその同じ住所には以前一時期ヘルダーリンが住んでいたと推測されている(12)。この家にはヘーゲルを含めて6人、あるいは7人の住人が暮らしていた。おそらくヘーゲルはそこで、これら住人の掃除や洗濯などを世話するクリスティアーナ・シャルロッテ・ヨハンナ・ブルクハルト（1778-1817）と知り合ったのであろう。言うまでもなく彼女はヘーゲルの第一子ルードヴィヒの母親である。

この地名「アルテン・フェヒトボーデン」が、現在ではUnterlauengasseと言われていて、現在の研究ではヘーゲルはUnterlauengasse 15に住んでいたと推測されている。ただし既に述べたように、記念板はLöbdergraben 11に貼られている（この違いはどちらの壁の面に貼り付けるかの程度の違いである）。ヘーゲルの住んでいた建物は1900年に取り壊されたという。その後別の建物が建てられて、現在の建物の場所にヘーゲルの記念板は貼り付けられるに至っているが、かつては他の場所にも記念板が張り付けられていたという。一つはUnterm Markt 12aであり、これはフィヒテの住んでいた家の番地であり、現在のロマンティカーハウスである、ヘーゲルの住んでいた家のすぐ前である。この記念板は1934年以降なくなってしまったという。どんな内容のものであったかは不明であるとのことであるが、ここにヘーゲルの記念板がかって貼り付けられていたのは単なる貼り付けるスペースの問題であり、場所を間違えているわけではない。ヘーゲルはかつてフィヒテが住んでいた家のすぐ近くに自分の住居を求めたのである。それはおそらく偶然ではなく、ヘーゲルのひそかな決意（尊敬するフィヒテを乗り越えたい）の表れであろう（ヘーゲルの墓は本人の希望でフィヒテの墓の隣りに建てられていることを想起されたい）。もう一つのヘーゲルの記念板はFürstengraben 16（ここには一時期シェリングが住んだ）にあったものであり、これも同じ頃になく

なったという。これもどんな内容であったかは不明であるというが、ここに貼り付けられた理由としてはヘーゲルの「シェリングと一緒に住んでいる」という発言を受けてのものと思われる。

イエナ大学本部前のヘーゲル像

なお他に、現在ヘーゲルに関する記念物で残っているのは大学本部側面の入口のそばにある石像と大学本部内に張られているプレートだけである[13]。ヘーゲルの石像は1987年に作られた新しいもので、顔もモダンである。プレートはヘーゲルが1801-1806年までイエナ大学の教授であったと書いてあるものである。これらの不正確さを一々あげつらうのは今は止めておこう。

ここでヘーゲルの住居問題と密接に関係する友人たち、シェリング、ニートハンマー、クネーベルの住居の問題を見ておこう。

5. イエナ時代のシェリングの住居

先ずシェリングの当時の状況を少し詳しく見てみよう[14]。シェリングは1798年、ゲーテの推薦でイエナ大学員外教授となる。同年10月5日、イエナに到着する。シェリング自身の講義紹介の掲示によれば、彼の住居は、im Oppermannschen Haus auf dem Graben である。この場所は現在に至るもなお正確な場所は不明であるが[15]、一般には Johannisplatz 22 であるとされている。ただしそこは現在の住居表示では Am Heinrichsberg 2 である。シェリングはそこでニートハンマーと同居していたとされている[16]。その根拠となるのはシェリングの当時の手紙である。この頃シェリングはニートハンマーと頻繁に手紙を交換しているが、シェリングの書いた手紙は残されているが、ニートハンマーの書いた手紙は一通も残されていない。理由は不明である。1798年7月11日の手紙にはこうある。「私をあなたの家に受け入れてくれるという新しい約束に感謝いたします。……いずれにしても10月以前にイエナに行くことは不可能です。」これはシェリングがイエナ大学に招聘されることが実質的に決まりかけていた時期のものであり、ニートハンマーは親切にも自分の家にシェリングを住まわせようとしているようである。同年8月6日の両親あての手紙でも、「イエナでは僕はニートハンマーの家に住む予定です」としている。しかし同じころ書かれたニートハンマー宛ての手紙では、「僕のイエナでの宿泊場所が9月の一週、あるいは二週あたりに決まるかどうか、庭付きかあるいはワイン山か、教えてくれ」としている。また8月29日の手紙では「あなたがま

だ僕のために庭付き住居 Gartenlogis を借りていないのであれば、それはそのままにしてください。僕はあなたの家の部屋に移り住むことが出来ますので、10月の初めにイエナで会えるでしょう」とある。意味ははっきりしないところもあるが、ニートハンマーがシェリング用に別の住居を探している様子が窺える。おそらく妻の妊娠・出産が迫っていたためであろう。しかし9月の手紙では「奥様によろしく。イエナのあなたの家を見、僕のために準備がなされているのを見ることができるのはなんと嬉しいことでしょう」とある。こうしてシェリングがニートハンマーの家に住んだと考えていいだろう。だが問題なのはそのニートハンマーの家がどこなのかということである。現在の研究ではニートハンマーは当時は Johannisplatz 22 に住んでいたという。シェリングもここに同居したのであろう。その後シェリングはシュレーゲル夫人のカロリーネと親しくなり、またイエナの有名な新聞『一般文芸新聞』（ALZ）との争いが泥沼化し、カロリーネの療養もかねてしばらくイエナを立ち去る決心をする（1800年3月2日の父への手紙参照）。1800年5月、シェリングはカロリーネとその娘のアウグステと共にバンベルクに旅立ち、10月までイエナに帰ってこない。この旅は当時15歳の少女アウグステの死という予期せぬ出来事が起こり、大きなスキャンダルとなった。シェリングは10月カロリーネとは別れてグリースと共に一人でイエナに帰ってきた。シェリングが引っ越した形跡がない以上そのままニートハンマーの家に住んだと考える他はないであろう。別れ別れになったシェリングとカロリーネの間には矢継ぎ早の手紙の交換があった。ただし残されているのはカロリーネの手紙のみである。半年後、カロリーネは1801年の4月23日にイエナに到着した。シェリングはおそらくこの頃、Fürstengraben 16 に転居したのであろう。そして実質的にはカロリーネと同居したと推測していいであろう（例えば1801年11月9日付の夫シュレーゲル宛へのシェリングの手紙に、カロリーネが追って書きをしている）。ただしカロリーネ自身は古くからのロマン派の住居、ロイトラガッセの家をそのまま借りていたようである。カロリーネはこの時、末の妹と姪をイエナに連れてきていたからである[17]。年が明けた1802年の春頃にはカロリーネは A.W. シュレーゲルとの離婚を正式に考え始め、そのために夫のいるベルリンへと旅立ち、シェリングもその後を追う。そしてベルリンから帰る時の1802年5月23日付のヘーゲル宛てのシェリングの手紙は興味深い。明日の夕刻にマダム・シュレーゲルが到着するので、新居にソファーや椅子や食卓を準備するようにマダム・ニートハンマーに頼んでくれ、というものである（B.I,67.）。マダム・シュレーゲル、つまりカロリーネはこれまでもイエナに住んでいたのに、なぜに新居を必要とするのか。私見を述べれば、夫と別居すると同時にシェリングともしばしばの間、離婚が正式に認められるまで、別居するためであろう。ただし具体的な証拠はない。とまれカロリーネはシェリングが住んでいる Fürstengraben 16 のすぐそばのホテル「シュヴァルツベアー」の隣の新しい住居に住むことになる。その住居の所有者はエッカートという名であるが、シェリングのアカデミー版全集では、ニートハンマー夫人の父親エッカートの所有だったものであると推測されている[18]。しかしこれには最近有力な異論が唱えられている。「エッカート」はニートハンマー夫人の父親のエッカート Eckhardt ではなく、皮なめし職人の親方のエッカート Eckardt だというものであり[19]、こちらの方が正しいようである。カロリーネは新居の眺望の素晴らしさを褒め称える

と同時に、皮なめし工場の悪臭に不満を漏らしている。なお1802年7月30日付のシュレーゲル宛の手紙でシェリングは、「カロリーネに対するニートハンマー家の」家賃に関する「催促に決着をつけるために」家賃を支払ったと報告しているが、それはロマン派の人々が以前から住んでいたロイトラガッセの家の家賃のことであろう。あれほど仲の良かったシェリングとニートハンマーではあるが、この頃から関係は悪化していったようである。1803年5月、カロリーネはシュレーゲルと正式に離婚する許可をワイマール政府から得て、6月にシェリングと結婚する。そしてシェリングはイエナを立ち去って、ヴュルツブルク大学に移る。

6. イエナのニートハンマー

F.I.Niethammer（1766-1848）はチュービンゲン大学の卒業生であり、1790年からイエナ大学に来て学位を取り、その後、そこの私講師、教授となった人物である。何故イエナに来たのかははっきりしないが、当時の代表的なカント学者ラインホルトの講義を聞くためと推測されている。ニートハンマー自身も熱烈なカント主義者であったのである。ニートハンマーは1795年から雑誌Philosophische Journal einer Gesellschaft Teutscher Gelehrtenを発行していたが、1797年からはこの雑誌にイエナ大学の同僚のフィヒテが共同編集者として加わることになった。そしてそれの第8巻、第一号（1798年）にフォーベルクの論文が掲載され、これをきっかけにして有名な「無神論論争」が起こることになり、ニートハンマーも当然この事件に巻き込まれることになる。この事件によってフィヒテはイエナ大学を追われることになったが、ニートハンマーは譴責処分を受けただけで事なきを得た。だがこれ以降ニートハンマーは10年ほど著書も論文も書かない日々を過ごしている。1804年にはヴュルツブルク大学に移り、更にはその後ミュンヘンでバイエルン公国の教育行政に深くかかわった人物である。

ニートハンマーは1797年にRosina Eleonora（1770-1832）と結婚している。ロジーナはイエナ大学の法学教授エッカートの娘であり、1790年に神学者のデーダーラインJ.C.Döderlein（1746-1792）と結婚したが、彼はすぐに亡くなってしまい、ロジーナは一人息子を連れて、ニートハンマーと再婚したのである[20]。こうした経緯からニートハンマー家は非常にたくさんの家屋、土地をイエナに所有することになった。ただしニートハンマーがイエナのどこに、いつ住んでいたのかは正確には不明のままである。1793-1801年頃はおそらくJohannisplatz 22に住み、その後は1801-1803年までLeutragasse 5に住んだとされている[21]。Leutragasse 5はロマン派の人々の住んでいた家であるが、1800年のカロリーネの娘の死の出来事の後には大半の者がイエナを立ち去り、兄シュレーゲルも1800年7月からイエナを立ち去って、バンベルク、次いでブラウンシュヴァイク、そしてベルリンへと移っている。そしてその後一時期イエナに来ることがあったが、1801年の11月にはイエナを最終的に立ち去っている。カロリーネはまだその家の一角を借りてはいたが、空き部屋が多くなったその家に1801年頃、ニートハンマー夫妻は引っ越したのであろう。この家はニートハンマーの妻の所有であった（もとは先夫デーダーラインの所有）。またFürstengraben 16の家

も妻の所有であり、こちらの家もこれまで何かにつけて彼らが使用していたが、1801年、彼らの転居でここが空いたのでシェリングがそこに住んだと考えれば、辻褄はあう。Johannisplatz 22の家はニートハンマーが結婚前から住んでいた家であり、結婚後もそのまま借りていたのであろう。しかし彼らは妻の住居であったFürstengraben 16の家で暮らすことも多かったのではなかろうか（これは私の単なる推測）。また更にはザーレ川の対岸のヴェーニゲンイエナの「グリュンネ・タンネ」の隣りの家屋敷もニートハンマー家の所有であった。これはヘーゲルの手紙からも分かる（B.I,125.）。またヘーゲルは1806年イエナ・アウエルシュテットの戦いの直後にニートハンマーに書いた手紙で、「Leutragasse（ホフマイスター版ではLeitergasseとなっている）の君の家、僕も数時間そこに宿泊していたのだが、は確かに火事に遭った。だが風が幸いして家だけは、街全体もそうだったが、無事だった」（B.I,123.）と伝えているのはかつてのロマン派の家のことである。しかしこの辺り一帯の家々は第二次大戦で爆撃、破壊され、「アイヒプラッツ」という広場になって現在に至っている。Leutragasseの面影は街から完全に消えている。ただし聞くところによると現在アイヒプラッツの再建計画が進行中であるという。面影がよみがえる日も近いかもしれない。

7. イエナのクネーベル

K.L.v.Knebel（1744-1834）は一時期プロイセンの将校をしていたが、その後ワイマール宮廷に勤め、ゲーテとワイマール公の仲を取り持った人物として有名なゲーテの親友である。退職後各地で暮らすが、クネーベルは1804年の夏からはイエナで暮らすことになる。彼は1803年の頃からイエナでの家捜しを始めている。彼はヘルダーの奥さんと仲が良く、家についても相談しているが、最初はイエナの『一般文芸新聞』の編集者のシュッツの家を借りようとした。シュッツはこの頃プロイセンにコンバートされてイエナを立ち去ったのである。その家は現在のイエナのドイツポストであり、とても大きな家である。そのシュッツの家が無理な場合にはせめてクリプステイニッシェン・ガルテンに住みたいとクネーベルは言っている。それに対してヘルダーの奥さんは「クリプステイニッシェン・ガルテンと一緒にオッパーマンハウス」を勧めたのであった[(22)]。（このオッパーマンハウスはシェリングが最初に住んでいた家であり、それはヨハニスプラッツ22と同定されてきた。そうだとすると二つの家はかなり離れた場所に位置することになる。）これに対してクネーベルはその提案を受け入れずに、ヘルフェルトハウスを選んで、

ノイガッセのヘルフェルトハウス

そこに1804年の夏に引っ越してきたのである。そこはノイガッセと呼ばれる通りで、南門の外に広がっており、ヘルフェルトハウスとその向かいの家が新しいイエナの南門、ノイトーア、の役割をしていた。この家は現在もそのままに存在している。非常に古びた建物であるが、イエナ大学の動物学その他の研究の施設として使用されている。この家の壁にはイエナの家の常として関係した人物の記念板が張り付けてあり、クネーベルのそれもあると同時に、ヘルフェルトの父親と息子のC.A.F.Hellfeld（1757-1840）の記念板もあるが、クネーベルが家を借りた当時のヘルフェルトハウスの所有者は、前記の父親の息子ではあるが、C.L.C.Hellfeld（1763-1842）の方である。こちらは弟にあたる。兄の方は当時はラートハウスそばの家を所有していた。こちらの家もフンボルトなどが一時借りて暮らしたりしていた家である。ただしこちらには記念板はない。

そしてクネーベルは1807年の春にクリプステイニッシェン・ガルテンに転居したのである。ヘーゲルがバンベルクに立ち去る直前の頃である。その後このガルテンをゲーテや多くの文化人が訪れるのである。先に言及したゲーテの手になるクリプステイニッシェン・ガルテンの風景は1810年に描かれたものであり、この時にクネーベルの息子（結婚した妻の連れ子）カール、当時14歳も同じような絵を描いているという。ちなみにこの息子の年長の遊び友達が当時画家として注目されていたカール・ブラント（1790-1814）である。クネーベルはその後もこの家に住み続けて、ルクレティウスの『事物の本性について』などの翻訳に精を出すのである。ヘーゲルはバンベルクに旅立つ直前にクネーベルの家を訪れており、同時にゲーテ宛に何かを預けているが、それが何であったのかは不明である。バンベルク時代には両者の間に何度か手紙のやり取りがある。クネーベルはイエナを立ち去ったヘーゲルに、1808年の「ナポレオン神殿」の建設のような貴重な情報を伝えてくれるのである（B.I, 245-7.）。ヘーゲルも非常な興味を持ってその情報に反応している（B.I,247-9.）。（これらの点については、拙著『ヘーゲルのイエナ時代　生活編』近刊予定を参照願いたい。）

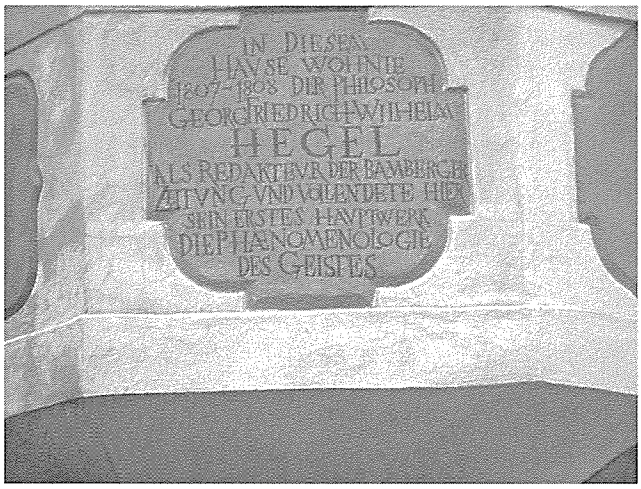
エピローグ　戦禍の中の彷徨—世界の魂

1803年にシェリングが、翌年にはニートハンマーがイエナを立ち去ってしまったが、ヘーゲルの周りにはなお多くの知人がいた。イエナは当時人口4300人ほどの小さな街なので、街中が知り合いであるといってもいいくらいであった。ヘーゲルも多くの人々と付き合いながら、熟成してきた自分の思想に形を与えるべく日々努力を積み重ねていた。そんなヘーゲルを襲った大きな出来事が1806年10月のイエナ・アウエルシュテットの戦いであった。10月9日シュライツで始まったナポレオン軍とプロイセン軍の戦いは、フランス軍の優勢のもとに戦闘は10日にはザールフェルトに移り、プロイセン皇子の戦死という予期せぬ惨事に見舞われながら、逃げるプロイセン軍をフランス軍が追いかける形で、戦禍は南と東から急激に小さな大学街イエナへと迫っていた。12日にはイエナの街から戦いの砲撃音が聞こえるところまで戦局は緊迫していた。街には続々とプロイセン兵、ザクセン兵が逃げ帰っていた。街を捨てて逃げてゆく住民も多数に上った。13日にはつ

いにイエナの街にフランス兵が侵入してきた。やがて正規軍も到着して、街はあっという間にフランス軍に占領されてしまった。軍隊の主要侵入通路となったカムスドルフ橋のすぐ近くに位置しているヘーゲルたちの住居にも早くもフランス兵たちが襲撃してきて、略奪が始まった。たまたまフランス語を話せたヘーゲルはその急場を、胸に勲章をつけたフランス兵に国家の名誉を思い出させることによって、乗り切ろうとしたが、それは略奪の度合いを緩和するのが関の山であった。兵士たちは続々とやって来る。先ずはどこか安全な場所に避難しなければならない。今となっては街の外に逃げることは不可能である。街の中はフランス兵でいっぱいである。行き場はない。だが本当にそうか。一つだけ安全な場所がある。それは敵の軍隊が占拠している家である。ここには略奪兵は侵入してこない。ヘーゲルはそう推理した。彼は「臨時代理長官（Amtskommissär）ヘルフェルトの家」に避難した（B.I,121.）。おそらくこの時もクリスティアーナと一緒であったであろう。ヘルフェルトの家はこの頃はラートハウスのすぐそば、現在のルードヴィッヒ・ワイマールガッセの角にあったと著名なイエナ史の研究者は推測しているが[23]、それは誤りである。ヘーゲル自身が書いているように、彼は「臨時代理長官」のヘルフェルトの家に避難しているのであり、当時の臨時代理長官はC.A.F.Hellfeldではなく、C.L.C.Hellfeld（1763-1842）である。それは当時の記録から確認できることである[24]。だからヘーゲルはクネーベルが間借りしているノイガッセのノイトーアという入口近くのヘルフェルトハウスに避難したのであり、ラートハウスのそばのヘルフェルトの家ではないのである。街の南門から100mほどの郊外にあるノイトーアのそばのこの家はフランス軍の部隊長などが宿泊したために略奪を免れたという。その代わりにクネーベル家は13日の夜にヴィンドクノーレンに野営したナポレオンたちのために炊き出しをしてそこまで食事を運んだという。「ナポレオンは俺のワインを飲んだんだ」というのが彼の自慢話の一つとなった[25]。そしておそらくヘーゲルはこのクネーベルとともに街の西門のヨハネス門の辺りで午後4時頃、既にイエナの街に入城していたナポレオンがヴィンドクノーレンの丘を目指して進軍して行く姿を目撃し、そこに「世界の魂」を認めて、馬上のナポレオンに敬礼したのであろう（「敬礼」は私の空想）。ナポレオン37歳、ヘーゲル36歳の秋であった。

ナポレオンはその日はそのまま街に帰ることなく、ヴィンドクノーレンの丘で野営して、翌日14日の決戦、いわゆる「イエナ・アウエルシュテットの戦い」に備えたのである。夜になるとイエナの街中がフランス兵の松明で照らし出され、マルクト広場は兵士たちで埋め尽くされた。ヘルフェルトの家の窓からその光景を見ながら、ヘーゲルは大詰めに来た『精神の現象学』の原稿、おそらくは「宗教」章の原稿を書き続けたのであろう。フランス革命の精神＝「世界の魂」はフランスを遠く離れて、今ドイツの田舎街イエナの地に到着した。若い日にチュービンゲン・シュティフトで感激して祝ったフランス革命の波が、巨大な軍隊のうねりとして現実にザーレ川の岸辺に到来したのである。二つの精神はイエナの街で出会ったのである。

翌14日何らかの理由で、おそらくは大勢の市民が噂を聞きつけて避難してきたために、この家に居続けることのできなくなったヘーゲルは避難場所を探して、自分の学生のガブラーの下宿先を訪ねた。ここはガブラーの父の威光でフランス兵が駐屯していた場所で、安全な所であった。「へ



バンベルグでのヘーゲルの住居跡の記念板

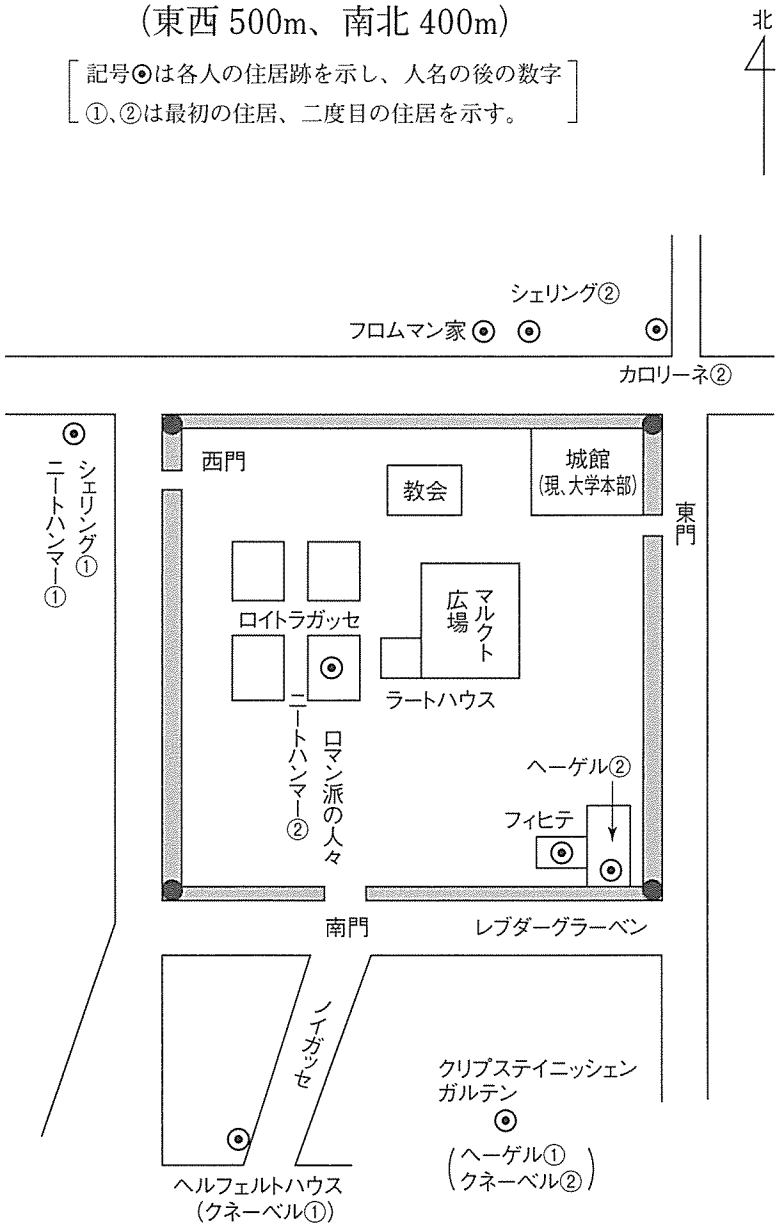
ーゲルは籠を背負った給仕女性と一緒に来た」とガブラーは伝えている[26]。ヘーゲルとクリスティアーネはここで一休みしたが、おそらくは一泊もしないまま、より安全な避難所が見つかったのでそこに行った。そこは日頃から世話になっているフロムマンの家であった。フロムマンの家はフランス軍将校たちの集団宿泊所になっていた。その数は100名を越えていた。更にそこにイエナの知人たちが避難してきて、信じられないほどの多数の人々がフロムマンの家で戦禍の日々を過ごしたのである。フロムマンもその妻も共に「ヘーゲルは他の同居人全てを連れて避難してきた」と伝えている。また当時9歳であったフロムマンの息子も、「ヘーゲルが給仕女性」と一緒に避難してきたと伝えている[27]。フランス軍とプロイセン軍の戦いはこの日、14日で決着した。フランス軍の圧倒的勝利であった。ナポレオンも当日はイエナの城館に宿泊した。だが戦いの後に待っていたのは多くの戦死者と負傷兵であった。イエナの街はあっという間に負傷兵でいっぱいになり、至る所が野戦病院と化した。落ち着いた場所で早く『精神の現象学』の残りの原稿を仕上げたい、それがヘーゲルの唯一の願望であった。数日の内にヘーゲルは、略奪で荒れ果てた自宅に帰って行ったであろう。ヘーゲルの手紙やフロムマンの手紙から推測すると、ヘーゲルはおそらく10月20日頃に自宅に帰ったであろう。そしてそこで残りの章を仕上げて、最後に「絶対知」章を付け加えた。この章は実はずっと早くから出来ていたもので、戦禍の中でヘーゲルがカバンに入れて大切に持ち歩いていたものである。多少の手直しで全ての原稿が出来上がった。ヘーゲルは前年亡くなった同郷の敬愛する先輩シラーの詩を引用してその著を閉じた。そしてこの日、ヘーゲルはこの最後の原稿を発送した。長い道のりであった。「序論 Vorrede」を除いて全ての原稿が整ったことになる。そして11月から一か月ほどヘーゲルは自著の校正のためにバンベルクに赴いた。ヘーゲルが住んだ家はPfahlplatzにあり、記念板が今も貼り付けられている。ヘーゲルはここで『精神の現象学』を完成した、とある。(ヘーゲルは年が明けた1807年の3月からも同じこの家に住んだようである。)

1806年の12月中旬にイエナに帰ったヘーゲルは自著の新しい「序論 Vorrede」を自宅で書き上げて、1807年の1月16日に送った。ヘーゲルは3月にはイエナを立ち去って、バンベルクに向かう。そして4月には『精神の現象学』の校正も終了して、出版されたのである。イエナに託したヘーゲルの夢はようやく実現した。ヘーゲルの哲学=絶対自由の哲学はここに成立した。ヘーゲルのイエナ時代は終わったのである。

以下の引用に関して、ヘーゲルの手紙は Briefe von und an Hegel. 4Bd. Hrg.J.Hoffmeister ,Felix Meiner.1952-1981. から引用し、B. と略して後に巻数とページを記す。シェリングの手紙に関しては、上記に含まれていないものに関しては、シェリングのアカデミー版全集の書簡集から AA.III. と略して巻数とページ数を記す。ちなみに書簡集現在までのところ、1 巻と 2 巻が刊行されているだけである。なおヘーゲルの著書からの引用は、アカデミー版の全集から、GW と略して、巻数とページ数を記す。

(1) Karl Schaeffer Zu den Gedanktafeln . Jena. 1858.
(2) 比較的新しい代表的なものとしては次のものがある。Ute Fritsch Ein Stadtplan von 1758 mit Eintragung der bedeutendsten Institutionen und Wohnhäuser, in „ Evolution des Geistes : Jena um 1800. Klett-Cotta, 1994. 最新のものとしては、次の大判のポスターがある。Romantisches Jena . Verlag Jena 1800, (2010).
(3) W.Jaeschke Hegel Handbuch. 2te Auflage, Verlag J.B.Metzler, 2010. S.19. T.Pinkard Hegel . Cambridge U.P. 2000. p.106 参照。
(4) G.Biedermann G.W.F.Hegel. Urania-Verlag, 1981. 邦訳、尼寺義弘訳、『ヘーゲル』大月書店、1987. 47p.
(5) D.Ignasiak, F.Lindner Das philosophische Thüringen. quartus-Verlag 1998. S.130.
(6) 同上書、S.130 参照。
(7) Eliese Campe Aus dem Leben J.D.Gries. 1855. S.49. S.90.
(8) G.Nicolin Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen . Felix Meiner Verlag, 1970. S.572.
(9) J.W.Goethe Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe. Bd 13.2. 1993. S.53.
(10) 以下の記述は次の書物からのものである。Familienarchiv Krippstein,Band 1 Peter-Jürgen Klippstein. Erfurt im Eigenverlag, 2009. S.135-137.
(11) H.Düntzer Zur deutschen Literatur und Geschichte, ungedruckte Briefe aus Knebels Nachlass. Bd.1, 1858. S.163.
(12) Evolution des Geistes: Jena um 1800. Hrg.von F.Strack. Klett-Cotta. 1994. S.700.
(13) 以上は次の書物の記述による。W.Haun, D.Ignasiak, B.Oehme, I.Traeger Gedenktafeln Kulturgeschichte an Jenas Häsern. jena-information, 1990. S.40.
(14) 以下のシェリングに関する記述は、シェリング全集、書簡 2Bd. の編集者の解説を参考にしたものである。F.W.J.Schelling Historisch-Kritische Ausgabe, Reihe III, Briefe 2. Hrg von T.Kisser. Frommann-Holzboog. 2010. S.1-179.
(15) Peer Kösling Die Familie der herrlichen Verbannten . Jenzig-Verlag G.Köhler, (2010). S.82-3.
(16) これは多くの研究者が主張している。例えば現在の代表的なものとしては、Xavier Tilliette Schelling Biographie, aus dem Französischen von S.Schaper. Klett-Cotta 2004. S.81 参照。
(17) Brigitte Roßbeck Zum Trotz glücklich Caroline Schlegel-Schelling. Pantheon Verlag, 2009. S.205. 参照。
(18) シェリング全集、AA. III. 2Bd. の注 S.802 参照。
(19) Peer Kösling 前掲書、S.32-3 参照。
(20) G.Wenz F.I.Niethammer (1766-1848) Theologe,Religionsphilosoph,Schulreformer und Kirchenorganisator. München 2008. S.13 および S.77-86 参照。
(21) 前掲書、Evolution des Geistes. S.704.
(22) J.G.Herder Briefe Gesamtausgabe 1763-1803, 8Bd. Bearbeitet von W.Dobbek, G.Arnord. Hermann Böhlaus Nachfolger Weimar. 1984. S,563.
(23) B.Hellmann (Hrsg) Bürger, Bauern und Soldaten. Napoleons Krieg in Thüringen 1806 in Selbstzeugnissen Briefe, Berichte und Erinnerungen. hain Verlag 2006. S.112 参照。
(24) J.A.L.Faselius Neueste Beschreibung der herzoglich sächsischen Residenz- und Universität-Stadt Jena. Jena, 1805. S.84. 参照。この本は現在、インターネットの「グーグル 書籍」で読むことが出来る。
(25) 前掲書、Bürger, Bauern und Soldaten. S.108-9. 参照。
(26) G.Nicolin 前掲書、S.67-8. 参照。
(27) フロムマン夫妻、およびフロムマンの息子の書いたものは、上記の本、Bürger, Bauern und Soldaten、に収録されている。S.80,219,233.

参考資料

1800年前後のイエナの街
(東西500m、南北400m)

[記号⊙は各人の住居跡を示し、人名の後の数字
①、②は最初の住居、二度目の住居を示す。]